

中山道を通った

和宮の大行列

大行列を迎えた美濃の人びと



皇女和宮

1. 2万人以上の大行列

京都から江戸までは中山道が利用されました。木曾路・上州路など山間部を通るため、「裏街道」とも呼ばれていましたが、海難事故や川止め心配も少なく、比較のおだやかにあることができました。

天下の將軍への嫁入りの旅は、大名の参勤交代の旅とは比べものにならない大行列でした。幕府は、行列の安全を守るため、御輿の警衛に12藩、沿道の警固には29藩を動員しました。和宮の行列は、本隊が千数百



和宮供奉名簿・行列図

幕末、ペリー来航以来権威を失いつつあった江戸幕府は、京都の朝廷（天皇）の力を借りて国の安定を図り、外国の脅威に立ち向かおうとしました。それが「公武合体」という政策です。その犠牲となつて、第十四代將軍・徳川家茂に嫁いだのが、明治天皇の前の天皇・孝明天皇の妹君である皇女和宮でした。

人で、警固の者や人足などを合わせると2万人以上、馬も千頭をこえたほどでした。その長さは50kmにも達したと言われています。

2. 最初の宿泊地・赤坂宿

行列は、文久元年（1861）10月20日京を出発。10月25日美濃に入



嫁入普請の家並み

り、今須・関ヶ原を経て、赤坂宿の本陣で宿泊しました。

和宮の通行に先立ち、8月17日、「見苦しい古屋や空地は恐れ多い」というお触れが出、新築54軒を含め250軒以上の家屋の突貫工事が行われました。宿そのものが新しくなるほどの普請（工事）でした。そのため、赤坂宿には今も、「姫普請（嫁入普請）」と言われる格子の入った古い家が多く残っています。

3. 呂久（揖斐川）での休憩

文久元年（1861）10月26日、和宮の御輿は赤坂宿を出発。やがて、呂久の渡しに到着しました。大垣藩が用意した御座船に乗り、川岸の景色を眺めながら「落ちて行く身と知りながらもみじ葉の人なつかしく、こがれこそすれ」と、京の都が遠ざかって行くせつない思いを詠まれました。

川の改修で渡しの位置は変わってしまいましたが、元の場所に「呂久の渡し跡」の石碑が建ち、この歌は歌碑となつて「小籾紅園（おずこうえん）」に残されています。

4. 万全を期した河渡宿と渡し

和宮一行は、呂久・小籾紅園で休憩した後、美江寺宿を通り、昼に河渡宿に到着、昼食をとりました。

この河渡宿は、河渡川（長良川）の渡河を担った小さな宿場です。少しの雨でも増水し、「川止め」に備えて、規模のわりには旅籠屋が比較的多くありました。

和宮一行を迎えるために、助郷（すけごう）の人びとも、宿場や道路の清掃や草刈り作業など、馬の提供や人足などになり出されました。また笠松にいた美濃郡代は、河渡宿へ医師2人を派遣するなど、万全を期しました。

この日、昼食時の飲料水には、水質の良かった本陣・水谷家の井戸水が使用されましたが、ご到着一週間前から青竹の矢来が組まれ、しめ縄が張られて使用禁止となりました。

この頃の河渡川（長良川）は、川幅が150間（270メートル）ほどもありましたが、平時よりも万全の体制がとられました。長さ9間（16メートル）の舟に、駕籠のまま載せて長良川を渡るので、中央に屋根をかけ、障子をはった舟に「ご駕籠台」を据え、8人の水主が乗りました。またお供舟は2艘、引舟は3艘、他に川下に用心舟4艘を出すなど、非常の場合に備えました。

5. 宿泊地・加納宿では…



現在の加納宿



広重・木曾街道加納宿の絵

和宮の行列では本陣に88人、その他の宿舎は1,617人にもなりました。そのうえ、前々日には、菊亭中納言など394人、前日には、広橋一位など365人が脇本陣などに宿泊しました。さらに、翌日にも坊城中納言など282人が泊まりました。

この他に、助郷人足延べ16、212人、馬825頭にその他の人足も必要でした。これらの人馬賃金が12、730両余りで、総額15、000両以上の経費がかかりました。

和宮の本陣での夕食時の献立は、一汁四菜で、膾（鱈・みぞれ大根・二はい酢）、汁（赤みそ・蕪小才）、香の物（奈良漬瓜・沢庵大根）、平（牡丹海老・生ゆば・百合根）、焼き物（生ぶり付け焼き）、飯というもので50人分用意されました。その他に一汁三菜、一汁二菜の献立が350人分出されました。

和宮の行列の御輿が通過する際には、庶民は見物をするのを禁止されました。「男は目に触れる所に出てはいけない。女は戸口から下がって平伏して見送ること」などが命ぜられ、勿論声高で話をするなどできませんでした。

また、鳴り物・工事など騒音は前後七日間に渡って禁止されました。さらに「犬は必ず繋いでおくこと」「籠を取り外すこと」「道筋の便所を

取り外すか、囲いをつけること」「家ごとに夜は行燈を出すこと」など、街道筋へ命令を出しています。その他に、「葬送を出さないこと」「寺社に集まらないこと」「目に触れる所での田畑で耕作しないこと」なども命ぜられました。

6. その後…

翌日の10月27日朝、加納宿を出発した和宮は、その日は鶴沼宿を通り太田宿に宿泊。そして28日は大湫宿、29日は中津川宿宿泊を経て、落合から木曾路へ入り、江戸までの旅を続けたのです。11月15日に無事に江戸に着き、和宮と徳川家茂との結婚は翌・文久2年（1862）2月に行なわれました。

○この文章は、「中山道―美濃十六宿」『岐阜市史・近世』「加納町史」『岐阜市合渡の歴史』などをもとに、橋村健と後藤征夫がまとめました。

岐阜市歴史博物館ボランティア

「お話・岐阜の歴史サークル」

代表 後藤 征夫

<http://book.geocities.jp/gifuueki/ekistop.htm>

TEL 058-231-6726

河渡の渡しがあった付近



英泉・木曾路の駅河渡・長柄川鵜飼船の絵

その日の夕方、加納宿の本陣・松波藤右衛門の宿に着きました。本陣跡には「皇女和宮御仮宿泊所」「中山道加納宿本陣跡」の石碑が建ち、「遠ざかる 都」として旅衣 一夜の宿もたちうかりけれ」という和歌が刻まれています。加納宿で宿泊したのは、